

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

2018. 1

No.7



平和の絵 - 「戦争と平和」

20点連作 - 第5作

西村計雄 作

斎場御嶽(セーファウタキ)

300号

沖縄
平和祈念堂
所蔵絵画紹介

〈制作意図〉琉球開闢の地・久高島を臨む随一の霊場「斎場御嶽」。人びとの悲しみや喜びのすべてを秘めてきたこの安らぎの場所。あかあかと輝く太陽に映える久高島に向かって、静かに祈るノロの姿。その姿にひき寄せられる作者の心が投影されている。(昭和56年2月13日寄贈)

西村計雄 ■ 明治42年、北海道生まれ。東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・クリティック賞、勲三等瑞宝章、他受賞多数。北海道岩内郡共和町名誉町民、共和町立西村計雄記念美術館開館。2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

【自然科学部門】



トーマ クラウディア

- 所属：琉球大学大学院医学研究科
細菌学講座・准教授
- 年齢：49歳
- 研究題目：
沖縄で多発する細菌感染症
レプトスピラ症に関する研究

【人文科学部門】



下地 理則(しもじ みちのり)

- 所属：九州大学大学院人文科学
研究院・准教授
- 年齢：40歳
- 研究題目：琉球語の記述と記録保存、
および琉球語と世界の諸言語を
比較する言語類型論的研究

【社会科学部門】



坂下 雅一(さかした まさかず)

- 所属：一橋大学大学院
社会学研究科・特別研究員
- 年齢：49歳
- 研究題目：
戦後・現代沖縄のエスニシティと
ネーション

沖縄協会では、沖縄の地域振興、学術振興に貢献する人材を発掘し、育成するため、昭和54年(1979年)から沖縄研究奨励賞を設け、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学・人文科学・社会科学)を行っている50才以下の新進研究者又はグループに対し、その年ごとに3名以内で贈呈している。本年度で第39回を重ね、全国11都府県から17件の推薦応募が寄せられ、選考委員会(牧野浩隆委員長)において厳正・慎重な選考を重ねた結果、受賞

者を3件に決定した。

沖縄で多発する細菌感染症レプトスピラ症に関する研究

受賞理由

トーマ クラウディア
地球温暖化の進行により、熱帯・亜熱帯性の感染症の拡大が進むことが危惧されている。このため、熱帯・亜熱帯性感染症の感染・発症機序の解明や効果的な病原診断と治療のた

めの研究の一層の推進が求められる。こうした分野の研究は沖縄においてこそ積極的になされるべきである。トーマ クラウディア氏は沖縄の地において、そうした熱帯・亜熱帯性感染症の感染・発症機序に関する優れた研究を進めるとともに、診断に必要な精度の高い効果的な細菌同定法の確立に関する研究も展開してきた。とくに、沖縄で多発する細菌感染症であるレプトスピラ症に関する研究成果は重要なものである。

日本国内におけるレプトスピラ症の症例の半数は沖縄で発生しており、主に河川でのレジャー等で感染する。年間900万人の入域観光客がある沖縄県において、その対策は重要な課題である。病原性レプトスピラの持続感染機構とそれに連なる腎不全誘発機序の解明に取り組んでいるトーマ氏の研究は、それゆえたいへん重要なものであると言える。また、現在のレプトスピラ感染診断法は煩雑でかつ信頼性に問題があるとされ改善が求められているが、同氏はレプトスピラ症の迅速診断キットの開発も手掛け、実用化が射程に入るところまで研究を進展させた。さらに、観光客に有用となるであろう沖縄県のレプトスピラ感染ハザードマップを作成するという事業にも着手している。これらの研究実績は高く評価されるものである。

以上のようにトーマ氏は沖縄の地でなすにふさわしい熱帯・亜熱帯性感染症の研究を積極的に展開し、優れた成果をあげている新進気鋭の細菌学者であるが、これに加え、沖縄出身のご両親からアルゼンチンに生まれ育ったことでもあって、スペイン語、日本語、英語などの多言語を駆使する能力を有しており、沖縄の学問環境のグローバル化にも大きな役割を果たせる人物だということにも注目したい。今後の一層の研究推進と幅広い活躍が期待される。

(西田 睦 選考委員)

琉球語の記述と記録保存、および琉球語と世界の諸言語を比較する言語類型論的研究

下地 理則

受賞理由 下地理則氏は、従来の記述研究の方法に言語類型論を融合させて、宮古伊良部島佐和田方言を記述し、

A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language (南琉球語伊良部方言の文法)を九州大学出版会から刊行した。それには音韻、アクセント、名詞、動詞、形容詞等の形態論や様々なタイプの複文の記述研究の成果が収められている。一つの方言の全体を記述したものとしては琉球諸語の研究の中で最も詳細かつ包括的なものである。

下地氏は、日本語学会、日本語学

会、日本方言研究会の国内の全国学会誌に琉球諸語に関する論文を日本語と英語で発表し琉球諸語の文法現象が言語類型論的にみても世界の諸言語の中で興味深いことを明らかにしている。下地理則氏は、世界的にも知名度の高く Mouton 社から刊行された Handbook of the Ryukyuan Languages. の共編著者として、また Cambridge University Press London, Routledge. Stanford University など、外国で出版された著書に論文を執筆し琉球諸語に関する研究を海外に発信している。言語的多様性が広く知られている琉球諸語は、相互に意志疎通ができないほど言語差が大きく、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の6言語に分ける研究者もいる。下地氏は、言語型類地理論という新しい研究方法で伊良部方言の研究成果を他の琉球諸語に広げて、係助詞「o」および主格の「ga yu nu」、および無標形式の機能分化と地理的分布の関連性の解明を目指した研究を始めた。琉球諸語の様々な文法現象に普遍的な法則がどのように内在しているか、あるいは、類型論的にみて琉球諸語に特有の現象なのかを解明しようとするもので、その研究成果が期待されることである。類型論の視点から文法現象の生成過程を歴史地理的に解明する上で、琉球諸語が好都合な地域であることに着目して始めたも

のである。下地理則氏は、琉球諸語の若手研究者のリーダーとして琉球諸語研究を牽引している。下地氏の研究が着実に進み、琉球諸語研究の進展と国際化に大きな力を発揮することを期待するものである。(狩俣 繁久 選考委員)

戦後・現代沖縄のエスニシティとネーション

坂下 雅一

受賞理由

坂下雅一氏の研究は、戦後沖縄における状況が未だ極めて流動的であった1945年から1956年の時期の沖縄県における政治的アイデンティティの在り方を、近年理論的展開の著しいナショナルリズム研究の国際的な潮流を踏まえて分析した地域ナショナルリズムの歴史社会学的研究である。

同氏はネーションのヴィジョンを「我々カテゴリー」「理念」として捉え、この分析枠組みに基づき、沖縄の政治界で相争う諸政治アクターが「我々の本来あるべき姿、将来めざすべき理想」を提示しあい、それが政治界に支配的なナショナル・アイデンティティを変容させていくとし、1946年ー1956年の期間に焦点を絞り、沖縄の大学図書館・公文書館に保存されているこの期間の新聞や議会・行政資料を長期間にわたって収集・分析し、琉球・沖縄におけるナショナル・アイデン

ティティの変容を実証している。

そして基本的に緊張関係にあるがゆえに不安定性を帯びた「日本人」と「琉球人」という「我々カテゴリー」を一つにまとめて「複合ヴィジョン」を安定させる機能を持った「我々カテゴリー」が「沖縄県民」であるとし、1946年ー1956年の期間に的を絞り「沖縄県民」の起源について論じている。

沖縄を取り巻く現今の日米関係と東アジアの政治情勢は、沖縄におけるナショナル・アイデンティティの議論を不可避のものとし、「理念」として沖縄

の自治あるいは独立を求める主張が高まっている。それは同時に、議論を歴史社会学の視点から照らし出す冷静な分析の枠組みを必要とする。今を読み解き、未来を構想するには、戦前にまで遡って琉球・沖縄の政治界におけるナショナル・アイデンティティの変容を分析している坂下氏の研究方法が我々に有益な見解を提供するに違いない。同氏は研究対象を現代沖縄に移し新しい研究に専心しているとのことであり、これからの研究成果が大いに期待される。(櫻井 國俊 選考委員)

首里城の高台から望む赤田町

【号数】 F 15



野見山曉治 作

「沖縄平和祈念堂美術館所蔵」

【作家名】 野見山曉治(1920年生 福岡県)
 【制作意図】 1940年の首里の姿。あまりの色の強さに戸惑った。もの陰は深く静まりかえっていて、描いている間ほとんど人に会わなかった。(同年の春休みに沖縄旅行で訪れる。滞在中、沖縄画家の名渡山愛順・安次嶺金正から世話や案内を受けた)
 【画歴】 東京美術学校油絵科卒。フランス留学、東京芸術大学教授、同名誉教授に就任。安井賞、芸術選奨文部大臣賞、毎日芸術賞など受賞。2000年に文化功労者に選ばれ、2014年には文化勲章を受章した。

ライオンズクラブ国際協会 337-D地区ガバナーによる記念植樹

平成29年7月28日、ライオンズクラブ国際協会337-D地区（鹿児島・沖縄）の吉村千鶴子地区ガバナー沖繩公式訪問を記念して沖繩平和祈念堂前庭で記念植樹が行われた。吉村ガバナー他多くの会員が訪れた。植樹に先立ち、去る大戦における全戦没者の御霊への鎮魂と世界の恒久平和を祈り参加者全員で黙祷を捧げた。

続いて、吉村ガバナーが平和の使者として飛び交うオオゴマダラ（蝶）の食草・ホウライカガミを植樹し、鋤入れを行った。

アジアデザイン文化学会一行

10月29日、アジアデザイン文化学会の一行82名が、糸数政次さん（沖繩県立芸術大芸分野教授）の案内で訪れた。糸数さんは沖繩平和祈念像の制作に従事した方。一行



は前日に県立芸大で行われた第11回アジアデザイン文化学会国際研究発表会に参加した中国・韓国・台湾・日本の会員の皆さん。糸数さんからは平和祈念像や龍像について制作当時のことや現在の状態など詳細に説明された。会員の皆さんも熱心に聞き入った。

沖繩ライオンズクラブの清掃活動

11月25日、沖繩ライオンズクラブ（城間弘健会長）の約50人の皆さんによる清掃活動が行われ、沖繩平和祈念堂管理事務所の前にある遊歩道周辺と花畑の雑草を清掃した。同クラブの皆さんは毎年2回、霊域を浄めるために清掃を実施している。ご協力により清らかな空間が広がった。

沖繩平和祈念像「浄め」

12月26日、沖繩平和祈念堂恒例の沖繩平和祈念像「浄め」が行われた。この浄めは、毎年大晦日の夜から元旦にかけて開催する「摩文仁・火と鐘のまつり」と新年を迎えるに当たって行われるもの。平和への思いを新たに、平和祈念像のほこりを払い浄めた。

今回も沖繩バス株のバスガイドの皆さん、沖繩県芸

振興センターの職員・研修修了生の皆さん他12人の方々が参加して行われた。参加者は、平和祈念像の上部から台座の龍の彫刻まで白い布で丁寧にふき払い、修学旅行団や各種団体から奉納された折り鶴・平和宣言などを整理した。折り鶴の一部は地元糸満市内の多機能型事業所に提供し、再生紙の資材として活用される。

第41回平成29年度函館豆記者の取材

12月24日、第41回平成29年度函館豆記者交歓会の豆記者13人と事務局引率者2人が沖繩平和祈念堂を訪れた。函館豆記者の一行は、毎年異なる地域の自然や文化、人びとの暮らしを学ぼうと沖繩取材に訪れており、当日は平和学習とあわせて県南部の沖繩戦関連施設を中心に視察と取材を行った。

第40回「摩文仁・火と鐘のまつり」

12月31日から2018年1月1日にかけて第40回「摩文仁・火と鐘のまつり」を開催した。この行事は、1978年10月1日の沖繩平和祈念堂開堂の年より実施している。当日は約800人が参加し、去りゆく年をふりかえり、新しい年の世界平和を誓った。まつりのクライマックスでは、参加者が持つたいまつで灯り、幾つもの陣を描き、午前0時を前にして清らかな祈りの歌・沖繩平和祈念像讃歌が歌唱された。そして、新年の訪れとともに平和の鐘が鳴り響き、同時に代表7人が陣中央の聖火台に平和の火を灯し、勢よく折りの炎が燃え上がった。続けて、参加者全員で新年を祝う歌曲を合唱し、すがすがしい空間を共有した聖なる炎と鐘の音が織り成す祭典を終えた。

今年も沖繩バス株のバスガイドの皆さん、沖繩県芸

「東京・沖繩・池袋モンパルナスとニシムイ美術館」展
平成30年2月24日～4月15日まで、板橋区美術館において標記美術館が開催される。

板橋区美術館・共同通信社主催。当沖繩平和祈念堂美術館から、野見山曉治（首里城の高台から望む赤田町）（1940年）を出品。

第53回（2017年度）琉球新報賞決まる

琉球新報賞は、琉球新報社が創刊70年記念事業として創設し、各分野で沖繩県の振興と発展に貢献された方の功績をたたえ顕彰するもの。2017年度は9名が受賞され、当協会理事の川平朝清氏（社会教育功労、評議員の新垣雄久氏沖繩振興功労）が選ばれた。9月24日の贈呈式・受賞祝賀会には大勢の人々が詰めかけ、受賞者を祝福した。

沖繩文化協会賞決まる

平成29年10月10日、沖繩学の若手研究者を対象にした第39回沖繩文化協会賞の発表が行われた。受賞者は次の3氏。

- ・比嘉春潮賞（歴史学・考古学） 宮城弘樹氏
- ・仲原善忠賞（文学・芸能学・工芸学） ヤナ・ウルバノヴァー氏
- ・金城朝永賞（言語学・民俗学） 金城朝永氏

民族学 小川晋史氏

第26回金城芳子基金の応募について
「金城芳子基金」は、沖繩女性の地位向上のために献身された金城芳子さん（1902-1991）の強い意志により、そのご遺族によって平成4年に当協会に設置され、沖繩女性のため、社会的に意義のある活動や調査研究を行う個人、団体及びグループに助成している。第25回までに25の個人・団体に助成を実施した。第26回の応募締切は30年3月31日。当日消印有効。

沖繩青少年勉強支援制度について

この制度は、本土（沖繩県以外の都道府県）で働きながら学ぶ沖繩青少年を支援し奨励するため、昭和48年に設置された。この制度に賛同いただいた沖繩出身者を含め多くの方々からの温かい寄付金でつくられた「働きながら学ぶ沖繩青少年支援基金」の運用により勉強支援金を給付し、これまで延べ1119名の働きながら学ぶ青少年が支援を受け、習得した資格や技術を活かしてそれぞれの進路を歩んでいる。平成30年度の応募は、4月1日～6月30日まで。当日消印有効。

※詳細は「公益財団法人沖繩協会」のホームページより